

津守 房江著

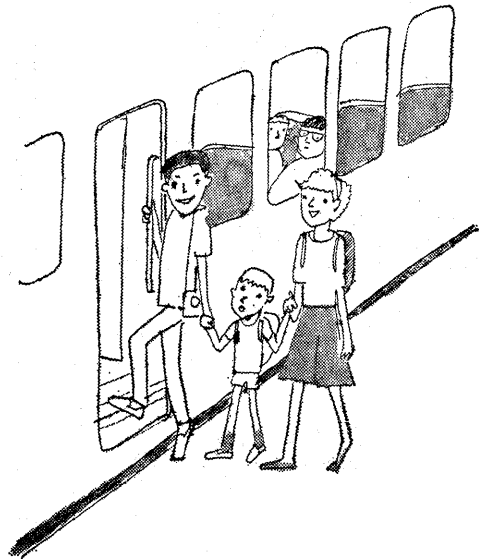
## 『育てるものの目』

(婦人之友社)

入江 礼子

「なんだか、とてもホッとしたわ。」私はこの「育てるものの目」の最終ページを閉じた時、思わずこのような言葉が口を衝いて出てきた。世に育児書が無数にあり、かつ、育児に関する情報が氾濫する今、果たして母親自身がそれを読んだり聞いたりして、心から安心し、二十四

時間絶えることなく続く子育てにむかう「力」を与えてくれるものがどれだけあるだろうか。むしろ母親自身を不安に陥れ、その心に残すものが焦燥だけであるというものの何と多いことか。もちろん育児書の著者達は母親の不安を救う目的で書いている方が大半であると思う。



しかしその意に反して、母親は逆に、不安や焦燥に陥るのである。著者の肩書を見ると、心理学者、医者、教育者であることが、これまた圧倒的に多い。そういう権威があるゆえに、育児書通りの発達をしない我が子を眼前にして、母親は罪悪感すら抱きつつ子育ての迷路に陥る。核家族化が進み、その上近隣との密度の濃いふれあいが希薄になっている現代では、母親は、特に第一子を育てている時、育児書に頼らざるを得ない面もある。そういう時、それらの育児書と違ってこの「育てるもの」目」は、育てている人に安心感と力を与えてくれるように思うのである。

この本の特徴は、まず著者その人にある。著者は、一男三女の四人のお子さんを育てられた母親である。母親自らが書き手となって今、育児のただ中にある母親に話しかけている。書く側も読む側と同じ立場であり対等である。いつも書く側から「教え諭される」立場にあった読み手である母親は、その受け手の立場から解放され、読みながら、自らの日々のことをあれこれ思いめぐらせ

ることが出来る。読み進みながら、自身の子どもと共にある生活がオーバーラップするといえばよいだろうか。或る箇所を読みつつ、心の中には昨日のあれこれが浮かんでくる。読みつつそのことをもう一度生き直すことが出来るのである。書いてあることが、単なる知識ではない深い体験から来るものであるがゆえに、それによって呼びさまされる読み手の記憶の内容がより鮮明になり、今迄気付かなかった記憶の裏に隠れたそのことの意味の一端が明瞭になっていくのである。「あつ、そうだったのか。そういうふうにも考えられるんだわ。」こう思った瞬間、今迄袋小路としか思えなかったことに、道を見出すことが出来る。それも、ハウ・ツー式の考え方ではなく、著者の書かれたものを読むことによって呼びさまされた母親自身の感じ方、考え方から見出すことが出来るのである。この本は、読み手自身を、思考の主体者に変身させることの出来る起爆剤であるかのようだ。

どうしてこのような起爆剤になることが可能なのだろうか。それはひとえに著者の生き方ないしは視点によっ

ている。例えば著書の中で「……考える時間をいくらか持ったのちに、また子どもたちの中にはいると、新しい見え方がひらけてくる。育児ということが、ただ幼ないものの世話をするということではなく、人間にふれるときなのだ実感でき、楽しみが増してきた。」と述べている。育児がただの雑事ではなく、人間に触れる時であり、育てる人（母親）自らも育つ場であるという視点は何ものにもかえ難い。私達は、育児を世話することのみに限定して考え易い。しかし、育児という営みは、育てるもの自らをも育てる力を持っているのである。ただし、そのことに、気付かないでいると、育児はいつまで経っても煩しい雑事のままたのである。子どもの見かけの発達ばかりに目を奪われて、ことの本質を少しでもつかもうという努力なしには……。

著書は、育てることの四つの側面に焦点をあててまとめられている。「子どもとのやりとり」「子どもの心にふれる」「子どもを支える」「子どもと人間について発見する」がそれである。それぞれに味わい深い小篇がぎゅっ

りと詰まっている。その中からいくつか拾ってみると「……手がかからないということは、この子とのやりとりが少なくなることである。意識してないがしろにするわけではないが、安心感からついあとまわしになることである。」とかく私達母親は、子どもの手がかからないことなることを良しとする傾向がある。手がかからないことで安心せずに「この子とのやりとりが少なくなることである。」ととらえ、「小さなやりとり」をととても大切に考えている。こういう日常のささやかなことをしっかりとすくい上げることの必要性をひしひしと感じさせられるのである。こういう時にこそ子どもは育つものなのである。又「外へ行くこと」の章では、「幼い子どもが外へ行くのを助け、安全に気を配って、ついて歩く日々は、そう長いことではない。楽しいときだったと思う。」と述べている。

子どもについて出て歩くということも、そのただ中にある母親にとっては、こういう日々がいつ果てることもしれないと感じられ、子どものそばについていながら、心

ここにあらざる状態になることが多いものである。それをさりげなくそう長いことではないと述べ、楽しいことだったと述べている。こう書かれているものを読むと、今迄またかと思っていた子どもについて歩くことも、もう少し積極的にかつゆったりとやってみようと思えるのである。さらに「よく遊ぶということ」の章では、「よく遊ぶ」ということは、何となく私が考えていたように、楽しく、元気に、仲よくということだけではない。遊びはじめは、自分の中に湧き起こってくる意欲を、どうやって形にしようかと探っている。その中には必ずといっていいほど、困難に出会う。思うようにいかない遊び相手や、おもちゃに怒り出すこともある。それらを乗り越えるためには、大人のひとことの励ましが、その場を支えもするし、こわしもする……」と述べている。これらの視点も、その場限りのたたく遊ぶばよいというものではなく、ことの経過を充分見詰め、存分に子どもと迷い進んできた著書の本分であるように思う。そこに至る過程をととても大切にしている。決して結果だけを

追わないのである。

著者のように子どもと共に、自らの在り方も含めて考えてくると、母親自身が、もう一度、子育てをすることによって生き直すことが可能であるように思える。子どもと触れる中で起る様々なことどもに思い巡らすことはとりもなおさず、母親自身が幼なかつた日々、記憶の奥底に沈んで、それまで陽の目を見なかつたものに、再び光をあて、その意味を見出すことである。ここに子育てが、他者である子どもを育てることにとどまらず自らを育てる力のあるものとして浮かびあがってくる。この本は、その意味で、子育ての書であるにとどまらず、母親育ての書でもあるのである。だからこそ、読了した時、深い「安心」と「力」を与えられたのだと思う。